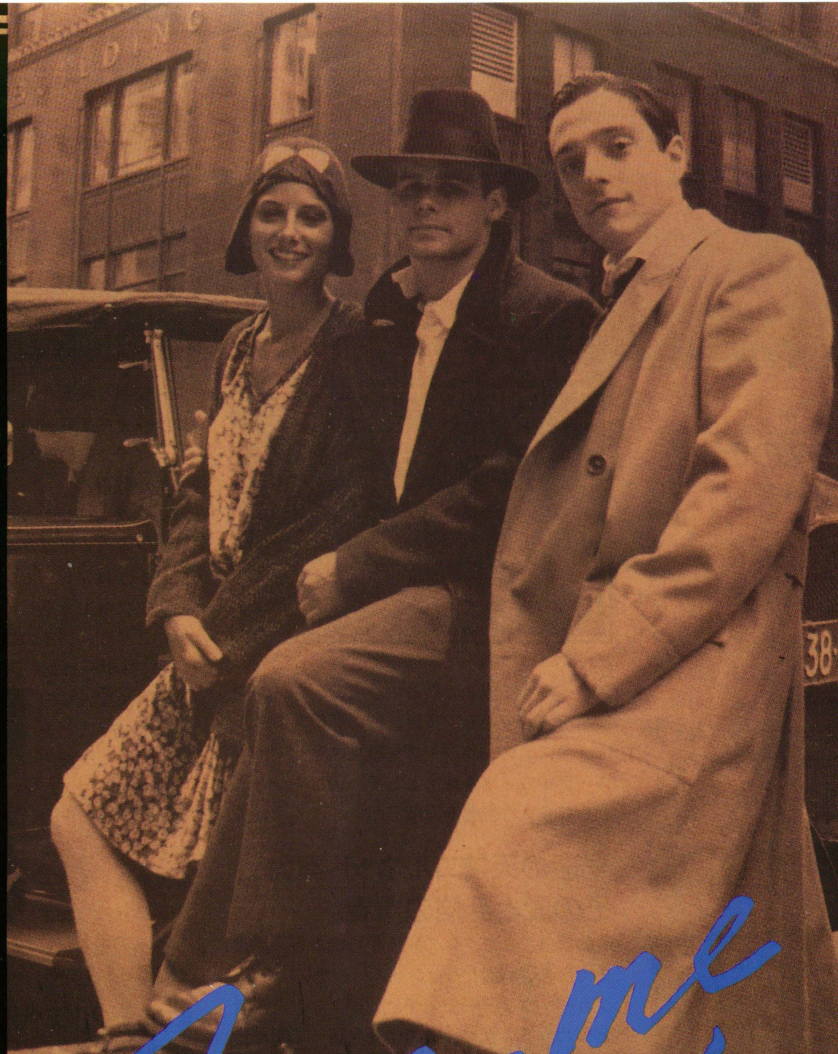


僕がジャズだ。



華麗なる時代を駆けぬけた
天才コルネット奏者ビックス・バイダーベックの伝説。

*Jazz me
Blues*

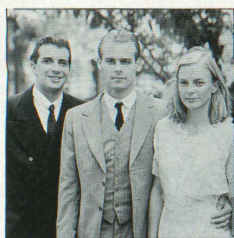


ジャズ・ミー・ブルース

EIX

ブライアント・ウィークス/レイ・エーデルスタイン/ジュリア・ニューイング/マーク・コルバー
バーバラ・ワイルダー/エミール・ルプセ/ティナ・ターナー/クラウス・ノーマー/マルツォ・オルソ/アリ・マク・アグ
監督: フビ・アウツェル ● 製作: アントニオ・アウエラ
撮影監督: バスク・ワレ・ラキニ ● 美術: カルロ・シー ● 編集: アメデオ・サルファ
原曲: ボブ・ワイルダー ● 衣裳: クラウディア・ワイルド/カーラ・セキ/ラ・ベルターニ
脚本: フビ・アウツェル/ジャン・ニコ/マウロ・タチ/リノ・カッセル
提供: フォンレヒンゲル
ヘラルド・エース
前座: シネマサン
配給: ヘラルド・エース
日本ヘラルド映画

HERALD



ビックスの吹くコルネットにはリズムがある。
正直に言おう、
私はビックスに尊敬を抱いている。
ボリス・ヴィアン



ジャズ・ミー・ブルース

監督:ブビ・アヴァティ/音楽監修:ボブ・ウィルバー
ブライアント・ウィークス
エミール・レヴィゼッティ/サリー・グロス
共同提供
フジテレビジョン
ヘラルド・エース
俳優座シネマデン
配給:ヘラルド・エース/日本ヘラルド映画



僕がジャズだ。

心にしみるビックスの伝説。

1920年代、アメリカ。狂乱の時代を、駆け抜けるように生きた一人の天才コルネット奏者がいた。ビックス・バイダーベック。白人ジャズマンとして、次代に多大な影響を及ぼした人物。『ジャズ・ミー・ブルース』は、これまで謎が多いとされてきたビックス・バイダーベックの伝説を描いた映画である。栄光と、天才であるがゆえの孤独——。これは、『バード』『ラウンド・ミッドナイト』などのジャズ映画の頂点に立つ作品であると同時に、一人の青年の苦い青春を描いて、多くの人々の共感を得る作品となるに違いない。



反逆と歓喜に満ちた

ジャズエイジを見事に再現!

スコット・フィッツジェラルドがジャズエイジと名づけた1920年代のアメリカは、何もかもが新しく輝いていたと同時に、坂を転げ落ちる寸前の時代特有の不安にも満ちていた。そんな中、“ロストゼネレーション”の若者達にとってのジャズは音楽以上のものを意味していた。ジャズはあらゆるものに反逆する気持ちの代名詞だったのだ。ビックスが即興で吹いてみせるメロディーは若者達を熱狂させた。今でこそジャズの即興演奏は当たり前だが、当時は、譜面に頼らないことは演奏できないに等しかった。この奏法を最初に行ったのがビックスだった。特別な才能を持って生まれてきたビックスは、幼い頃から一度聞いたメロディーなら、どんなものでも瞬時に再現することが出来たのだ。ルイ・アームストロングやデューク・エリントンなど、この時代に活躍したジャズプレイヤーと共に、

ビックスは、白人であること、最初に即興のスタイルを完成させたという点で、ジャズ史に名を残している。また、彼の即興スタイルは、後に、クールジャズを確立させたマイルス・デイヴィスを始めとして、後世のジャズメンに多大な影響を及ぼした。

早逝の天才コルネット奏者

その愛と苦悩の青春。

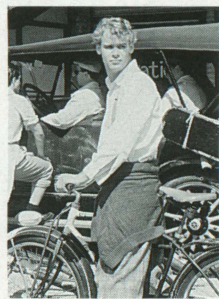
物語は、ビックスの死後から始まる。最後まで良き理解者だったジャズバイオリニスト、ジョー・ヴェヌーティが、ビックスの婚約者といわれる少女に、彼の生涯を語って聞かせるという設定で進んでいく。寮を抜け出し、街のジャズクラブに通い、ろくに授業にも出なかったシカゴでの学生時代。ビックスは、ここで本物のジャズの演奏に触れ、その後も一緒に演奏活動することになるジャズ仲間を得た。だが、ビックスの家族は、きちんとした職業にもつかず、ジャズに夢になる息子を許そうとしなかった。ビックスは、制作する度に故郷に送っていたレコードの包みさえ、両親が開いていなかったことを発見し、誰にも理解されない孤独をアルコールでまぎらわすようになっていく。やがて演奏することさえままならず、落ちぶれゆくビックスだったが、友の力を得て再帰に賭けるのだった…。

元ジャズマン、アヴァティ監督の

詩情あふれる映像オマージュ。

監督は『追憶の旅』『モーツァルト—青春の日々』、『いつか見た風景』など、印象派的な淡い色彩で、独自の世界を作ってきたブビ・アヴァティ。自らもプロのクラリネット奏者としての経験があるアヴァティは、ビックスの生涯を映画化するのが長年の夢だった。ビッ

クス伝説を映画化したものには、1949年にドロシー・ベイカーの原作で(ボリス・ヴィアンがフランス語訳を担当) マイケル・カーティスが監督、カーク・ダグラスが主演した『情熱の狂想曲』があるが、アヴァティはこのリメイクを作る気はなかった。彼は、「ミュージシャンがロマンティシズムやタブーに挑戦する姿勢に魅力を感じている」という。その気持ちこそが、15年の歳月をかけて、一切の美化もフィクションも排して、アメリカが生んだこの偉大な人物の生涯を描くことを成功させたのだろう。アヴァティ監督のビックスに対する優しさは、映画に登場するビックスの親友ヴェヌーティの眼差しにも投影されている。



甦える20年代ファッション

新鋭ブライアント・ウィークスの魅力

主役のビックスを演じるのは、新鋭ブライアント・ウィークス。「ハムレット」やE.E. カミングスなどの舞台で賞を獲得していたウィークスに、ビックス役として白羽の矢が立ったのは、アヴァティ監督の目に彼が、ビックスとそっくりに写ったからだという。ブルーの瞳に、憂いを秘めた青白い額は、狂乱の時代を生き急いだ青年そのものだった。それまでビックスについては、いくつかの曲を知っている程度だったウィークスだが、役柄にどんとどのめりこみ、撮影時は完全にビックスになりきっていたという。

また、この映画の中のもう一つの主役は、全篇に流れる音楽と言ってもいいだろう。担当は『コットンクラブ』でも音楽監督を務めたボブ・ウィルバー。現代的な感覚で、オリジナルスコアを再現してみた。ビックスの吹き替えにトム・ブレッチャー、その他ケニー・ダヴァーン、キース・ニコルズ、ヴィンズ・ジョルダノなど、優れたジャズミュージシャンを起用して、サウンド・トラックを制作した。(上映時間/1時間51分)

次回ロードショー!

シネスイッチ銀座
CINE SWITCH GINZA

銀座4丁目交差点和光ウラ

03(3561)0707

前売鑑賞券好評発売中! 一般1300円/学生1100円/ペア券2300円(当日/一般1600円・学生1300円・特別席1900円)